

Title	サンゴ礁の景観史
Sub Title	Landscape history of coral atolls
Author	近森, 正 (Chikamori, Masashi)
Publisher	三田史学会
Publication year	2005
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.73, No.4 (2005. 4) ,p.111(433)- 120(442)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	民族学考古学専攻設立二十五周年講演録
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20050400-0111

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

サンゴ礁の景観史

近 森 正

一、人間の到来と島の景観

ポリネシア人の起原は、紀元前一五〇〇年頃のフィリッピン諸島からインドネシアの東部の後期新石器文化にさかのぼる。特徴のある土器によってあとづけられる初期ポリネシア人の移動はニューカレドニア、フィジー諸島からサモアに達する。それにつづく拡張期の移動によって、ハワイ、ニュージーランド、イースター島を結ぶ、一辺九〇〇〇キロにおよぶ広大なポリネシア三角形の文化圏が形成された。

こうして地球上最後に残された無住の海洋空間がはじめて人類の居住域に入ったのである。ポリネシア人の定着は、はじめ火山島を選んでおこなわれたが、一貫した海洋進出の過程で海と陸とはさまに現われた低平なサ

ンゴ礁にも生活の場を見出した。それが優れた航海術によるものであったことはいうまでもない。しかし、彼らが孤立した島の環境なかで生存の可能性を探りだし、持続的に居住できるようになったのは何故か。

島に到来した人間と自然との関係について、ふたつの見方をあげることができる。ひとつはエネルギー収支の概念にもとづくシステム生態学の見方である。太陽エネルギーを基礎とする安定した極相群集の生態系の中に、人間の生活も組み込まれて、一定の秩序とバランスを維持していたと考える。それはルソーの「高貴な野蛮人」につらなる近代以来の「南海の楽園」のイメージを満足させるものであったし、今日の環境問題を論じる際に循環社会のモデルとして受けとめられた。

もうひとつの見方は、人間の到来が島の生態系にイン

パクトを与え、島の自然を退化させた原因だとする。安定的な極相状態を保っていた島の自然は、人間の居住が開始されると大きな改変をうけて生態過程から逸脱した。考古学の成果はそれに関するいくつもの証拠を明らかにしてきたが、わけでも緑豊かだった島が人口の増加とともに森林を失い、社会の崩壊を招いたというイースター島の事例は人為的な環境破壊の先史的モデルとして関心を集めることになった。

前者の機能主義的なシステム論は、生態系を流れる栄養やエネルギーについて、定量的な分析結果を提示することができても、人間と自然との関係をホメオスタティックな枠組みの中に閉じ込めてしまつて、歴史をとらえることができない。また後者は生態系の逸脱現象として歴史動態をとり扱つてはいるが、人間と自然を対立させた二元論に陥っている。人間を自然に対置させてしまふと景観をとらえることが出来ない。景観は人間の文化的社会的秩序と島の自然との協調あるいは融合を通して創造されるものだからである。人間は景観を創造することによって、はじめて住むべき場所を見出し、生存の可能性を広げてきたのである。しかも、それはあらゆる面で歴史的な過程である。

二、神々と人間の景観

白波に縁どられた礁原が広大な海原のなかに浮かび、エメラルドグリーンに輝く礁湖をとり囲んでいる。人間が住める陸地はその礁原の上に堆積したサンゴの砂の州島だけである。海面からの高さはわずか二、三メートルにすぎない。島の形態や大きさは礁原の幅、海流や波浪などの影響によつてさまざまである。土地というには、あまりにも心もとない。そこに、人間はいかにして居住の地を見出したのだろうか。

夜の闇の中でいのちが生まれた。

はじめにサンゴの幼生が生まれた。

それからサンゴが生まれた。

海の中の岩が大きくなって、島が生まれた。

「岩の頭」から最初の神マタリキが生まれた。

漕げカヌーを。漕げカヌーを。

いざ行かん。水平線の彼方のあの島へ。(プカプカ環礁のチャント)

マニヒキ環礁の人々は水面下の礁をパパと呼び、黄泉

の世界ハワイキからもち上がってきたと考える。それを表わすテ・パパ・イ・ハワイキは東ポリネシアの創世神話に語られる天空の神アテア・ランギに対する大地の神を指す。二人の神の結合が生きとし生けるもののすべてを生んだとされ、発生の根源を意味する。そこには人間の営為がおよぶことのない超自然的な力が支配する。人々はパパが離水してサンゴの砂礫が堆積し、島ができていく過程をつぶさに見つめる。マニヒキ環礁にはつぎのような創始祖先に関する説話が伝えられている。

「母なる島に住んでいた男、ヒクが漁に出ると海面に白波の立つところがあった。海の中をのぞくと、海底から岩が次第に大きくなってくるのを見つけた。しばらくして、またそこに行ってみると、その岩が海面に姿を現わし、島になっていた。おどろいたことに、そこにはすでにマウイ神の三人兄弟がいた。聞けばマウイ神の末弟マウイ・ポ・チキが釣り針にかかった島を釣り上げたのだということだった。ヒクは自分こそこの島の最初の発見者であることを主張したが、ついに争いになってしまった。争いあううちにマウイ神たちは地団太を踏んで天空高く飛び去った。そのときに島が小さく割れて、たくさんさんの小島ができた。

マウイ神に打ち勝ったヒクは、その島にココヤシを植えた。ある日、海から吹いてくる風に乗ってヤシの葉音がさわさわと鳴るのを聞いた。彼は妹とその夫トアにその一部始終を語った。トアの夫婦がカヌーに乗ってその島を訪ねてみると、ヒクが話したとおり、ココヤシがたわわに実をつけていた。夫婦は島にトウクアンガ・イ・ファカホトウ（マニヒキ環礁の古名）という名前を与え、そこに住むことになった。彼らがこの島の最初の祖先である。」

ヒクの説話はサンゴ礁が生長してくる様子を語り、島が姿を現わし、ココヤシが根をおろす様子を伝える。人間の世界はそれから始まる。

今から十数年前、マニヒキ環礁のヌマトウア一族が環礁の南側にある小さな砂の州島にココヤシの苗を植えた。ようやく三本の樹が根をおろした。強い日の光に輝く白砂の上に樹影が映ったのを見て、人々はこの島に「木陰の始まり」という意味のウリウリ・アタという名を付けた。このとき人々の心のうちに、あのヒクの説話がよみがえるのである。島にココヤシが生え、名前が与えられると、そこに人間の生活の意志が埋め込まれる。所有権や利益権を主張することができるようになる。その時か

ら島の景観は人間の営為によって文化の生成にゆだねられる。景観は現実に見えるものだけで成り立っているわけではない。象徴、世界観、神話説話体系などが自然環境に意味を与え、それが人間の行動のしかたを条件づけるのである。

マニヒキ環礁では子供が生まれると、所有地の一角に小さな穴を掘って、その子の胎盤を埋め、そこにココヤシの苗を植える。ココヤシは子供とともに生長する。成樹まで十二の段階で数えあげ、力強く生育すれば、子供も健康に育つという。こうして人々は伝承を語りながら、景観を体験する。

次のようなチャントの一節がある。「フェアトゥ（祖先のひとり）が海を越えてやってきた。島を探して。上陸地オモカに着いた。おお、フェアトゥはサンゴの岩を打ち砕く。おお、アライアヴァ（水路）の向こうにヤシの葉がそよいでいるよ。」（マニヒキ環礁のチャント）

外洋と礁湖の間を開削して、カヌーが出入りできる水路を確保することは居住の条件であった。水路をひかえた島は環礁の居住景観として、最も基本的なものであった。考古学的調査を通じて明らかにされた初期的な居住遺跡の立地もそれを示している。

三、生産と植生景観

人間が島に到来すると環礁の植生は急速に豊かさを増す。先史時代のポリネシア人は可能なかぎり多くの有用植物の種子や苗木をカヌーに乗せて運んだ。環礁に生育する維管束植物のうちの半数から三分の二が人間の手によって導入されたものである。それらは主に大陸原産であったから、塩分に対する耐性をもたない。根をおろすには綿密な保護と管理がもとめられた。とりわけタロイモやプラカ、バナナなどの根栽類、それにパンノキのように地中深く根をはる樹木は地下の帯水層に全面的に依存しなければならぬ。

この帯水層は島の面積が一・二ヘクタール以上、島の幅が二〇〇メートル以上なければ形成されない。サンゴ礁の地表には淡水の川や池はない。島に降り注いだ雨は瞬時に砂礫の多孔質な土壌にしみ込み、島の周囲から浸透している海水面の上に、静水圧を均衡させて凸レンズ状の淡水の水体をつくる。この水こそが人間を含めたあらゆる陸上生物にとって、まさに「命の水」となる。水体の最も厚い部分は島の中央部にある。人々はそこを掘り下げて、タロイモやプラカを栽培するための水田を築

く。大形の真珠母貝の貝殻やウミガメの腹甲でつくられた簡素な掘削具で営々と土木作業が続けられてきた。その規模はプカプカ環礁の主島にみられるような十数ヘクタールに達するものもある。

水田には植物の葉を敷き詰めてコンポストをつくる。丹念な土づくりによって腐植の増加をはかる。腐植は高いアルカリ性を示すサンゴ礁土壌のpHを低下させ、保水力を高め、日射で上昇しやすい地中の温度を安定させる。それが作物の栄養循環に重要な役目をはたす。タロイモとプラカの栽培には水田の掘削から、土づくり、植え付け、水の管理、除草、収穫まで、労働投下量はきわめて大きい。ヘクタール当り二九トンもの収穫がある。狭い環礁の島での高い人口密度はこの労働集約的な水田耕作によって支えられてきた。

環礁島の植生は島の中央部にあるタロイモの水田を中心として、塩分に弱い種から次第に塩分に耐性のある種に、海岸線に向かって同心円的な分布を示している。水田の周りには掘削によってできた廃土の堤がめぐり、島を襲う高潮や、海水のスプレーから作物を護っている。堤の上にはサトウキビやバナナ、コンポストにするための葉をつけた灌木が植えられている。その外側をココヤ

シヤパンノキなどの高木の林帯が取り巻く。林間には人間が到来する以前から自生していたと考えられるナンヨウイヌジシヤやサガリバナなどの有用樹が混在している。海岸をめぐる浜堤には塩分に強いクサトベラやミズガンピなどの海浜の自然植生が波浪から島を防御している。

人間の到来によって、島に自生していた種は淘汰を受けるとともに、あるものは管理、保護されるようになった。自生種と導入種との間にみごとな種間関係が成立し、濃密な林相が出来上がった。島の人々は生態学的条件をたくみに取り込んで、種の多様化をはかり、自然配置を再編成したのである。そのなかで、人々は水田耕作、果樹栽培、有用樹の利用、ブタ、ニワトリの飼育、海鳥、ウミガメ、ヤシガニなど野生生物の捕獲と保護、ボラの養殖といったさまざまな生計活動を展開させた。このようなアグロフォレストリーによって、自然災害による収穫の変動を平均化し、高い人口圧のもとで、限られた陸地面積を最大限に活用する緻密な土地利用システムを編み出したのである。

安定した生存の手段をあたえてくれる景観は人々によって世界観のなかで意味づけられる。プカプカ島民の世界観によれば、島それ自体は乾いた上層（ウエヌア）と

湿った下層(ウア)の二層から成り立っており、上層は男性の領域、下層は女性の領域である。島の中央に掘削されたタロイモの水田は下層に達する穴であり、そこは湿っている。したがってそこは女の領域であって、女性の性器を意味するウアと呼ばれる。タロイモは母親から受け継ぐ血をつくり、生命の源となる。これに対して、ココヤシ林の高みは乾いており、男の領域である。ココヤシの実実は父親から受け継ぐ骨をつくるという。島の景觀は人々にとってそれが自らの身体そのものとしてみなされるような象徴的空間なのである。

このような中心と周縁、低と高、湿と乾、そしてタロイモとココヤシの対立にみられる女性原理と男性原理の象徴的対立は、社会関係に反映されている。タロイモの植え付け、収穫などの農作業はもっぱら女性の仕事であって、水田は母系出自集団によって継承される。これとは対称的にココヤシ林は父系出自集団によって管理、継承される。こうした関係はさらに島の外側に向かって同心円的な広がりを見せる。海岸から礁原の縁までは女性の領域であり、外洋は男性の領域である。礁原や礁池での水産物の捕獲、採集は女の仕事であり、外洋の漁労活動は男性にかぎられる。水田の縁、海岸線、礁原の縁な

ど、両方の領域が接するところはココニコと呼ばれ、男女の交合を意味する言葉と同じである。男が水田に足を踏み入れたり、女がヤシの樹に登ったりすることは反社会的な行為として戒められる。外洋の魚には女性が手を触れることを戒めるような禁忌がいくつもある。神々に詠唱歌を捧げるときに、女たちが海側に向かって座し、男たちはその外側に内陸側に向かって立つ。それは景觀を身体的に体験することにほかならない。このように景觀にみられる象徴形式はそれを生み出した社会と相互に作用しあい、人々に一定の行動規準を与えるのである。

四、すみかの景觀

島に到来した人々が居住地をさだめるには、何よりもはじめに祭祀場(マラエ)を建設しなければならぬ。集落はそのまわりに営まれる。マラエは海岸の潮間帯にできる平らなビーチ・ロック(板干瀬)を切り出して、長方形の区劃にならべて建てられる。そのとき人々は、カヌーに乗せて運んできた先住地のマラエの石を新しいマラエの一角に埋め込む。海側の正面には神壇が築かれる。人々はマラエの儀式によって、神々に祈り、創始祖先につらなる出自関係をたどるのである。系譜をつたえ

る伝承は、カヌーを駆つて母なる土地からやってきた最初の祖先がマラエを建てる話から始まる。

「最初の祖先マフタは巨大なカヌーに乗つて海を渡り、小島テ・プカに着いた。彼はそこにココヤシを植え、マラエを建てて娘夫婦とともに住んだ。」「サバイキからやってきたマイルアは、最初に上陸したトケラウにマラエを建てて、彼の息子をそこに住まわせた。」（トンガレヴァ環礁の伝承）などはその一例である。

系譜を伝えるマラエは祖先の世界（他界）への入口である。死者の靈魂が赴く世界ハワイキ・イ・テ・ポは、祖先がこの島へ到来したときに船出した母なる土地でもあつて、沈みゆく太陽が照らし出す金色の波間の彼方にあるという。人々は陸と海をつなぐウミガメを神々に捧げ、世代をさかのぼりながら、祈りの中で自らの原郷の地を訪ねるのである。世代をさかのぼつて到達するはるかな過去は、はるかな水平線の彼方で時間と空間の境を失つて融合してしまふ。

このような時空間の合一した世界のさらに先に、あらゆる生命を生み出す超自然的な力の支配する宇宙世界がある。「そこはココヤシの実の中心のようなもので、そこから果肉も、果汁も殻も生まれてくる。」とマニヒキ

環礁の人々は表現する。高い階層に属する集団のマラエは、より広大な宇宙を支配する神々を祀り、低い階層に属する集団のマラエは各地域や地方の神々を祀る。

このようにマラエは分節化した集団の領域的な中心にあるだけではなく、より大きな集団の領域的中心にかさなり、さらに部族全体の領域的中心にかさなる。そのかさなりは同心円状に展開し、遠い過去と一緒になつて母なる地にかさなり、宇宙の中心にもかさなつてしまふ。

この同心円は目に見える景観ではない。人々の心の中にある、いわば内なる景観である。マラエそれ自体、集落の中心にあるとはかぎらない。村からはなれた神聖な島の先端近くあることもあれば、神々が往来する外洋に面した海岸に建てられることもある。人々はマラエによつて創られた宇宙の中心につながると観念する世界の中で生きるのである。

マラエをもつ集落の景観は、したがつて宇宙の形象化にほかならない。こうして意味の体系によつて秩序だてられた居住地は「すみか」とよぶのに相応しいものである。人間にとつて「すみか」とは住まう意志の具体的な表現であつて、受動的に与えられるものではないからである。それは生態学的適応のような受け身的なもので

はなく、住むべき見出された土地に働きかけ、創造した場所なのである。けして安全をあたえることのない海洋空間のなかで、緊張にたえながら「すみか」の景観が創られた時、はじめて居住に永続性がうまれる。

ポリネシア人は移住にあたって、つねに宇宙の中心軸を一緒に持ち運んだということが出来るだろう。それによつて、どれほど遠くに居住地を移ろうとも、自分の居住地を世界の中心とみなし、それが時空を超えてはるか原郷の地につらなることを確信する。こうして人々は見知らぬ土地をあらたに受け入れ、そこを自分のものとすることができたのである。

五、景観の創造と喪失

人類史を考えると、人間の環礁への居住はきわめて新しい。後氷期の海面上昇が終わってから低潮位面に形成された礁の上にサンゴや貝の破砕片、有孔虫などが堆積して島ができる。人間の居住の開始は二〇〇〇年以前を大きくさかのぼらない。東ポリネシアでは一〇〇〇年前から後のことにすぎない。そこが人間のハビタートとして厳しい環境のひとつであったからに違いない。そのために優れた航海技術や膨大な民族の知識が求められた。

しかし、それだけではない。生存のための景観を作り上げなければならなかったのである。

景観は環境と人々の活動の諸相が生存目的にむかつて自己組織化した全体であつて、環境要素の集まりでも、それらの因果関係の産物でもない。生態学のニッチやハビタートとも違う。自然的かつ文化的な諸相が連動しながら、過去から絶えず変化しつつ、生み出された四次元的な空間なのである。その特徴は客観的であるとともに主体的なものであるから、きわめて個性的である。このような景観の創造によつて、人々はそこに生きる意志の杭を打ち込み、茫漠とした海洋空間の真つただ中に生存を確保することができたのである。したがつて、この創造に失敗した人間集団はただちに島を捨てて、撤退を余儀なくされる。島を離れなければならなかった人々の歴史もまた数々ある。

いま、多くの島々で景観が失われている。近代における市場経済の導入は島の景観を単一な規準ではかる見方をもたらした。グローバルな市場の一元的な規準は長いあいだに居住の歴史のなかで作りに上げてきた、多様で、固有な景観の存在を許さないのである。貨幣経済の規準で抽象化された土地は商品化されて、プランテーション

などに売却されたり、あるいはリースされたりする。人々はコプラ（ココヤシ）、バナナなどをはじめとする換金作物の生産と個人所得の増大に集中するようになって、市場経済の情け容赦のない力に組み込まれていく。市場のためにたえず新しい土地を耕作するようにしむける力が景観を破壊していく。

市場価値をもたない植生は取り除かれ、自然は単純化してしまった。そのために海岸線の侵食、土壌の風食、流出などの環境退化がはじまっている。地球温暖化による海面上昇や異常気象がこれに拍車をかけていることも事実である。共同体で維持してきた土地は個人所有によって細分化し、保全機能を著しく減退させている。農産物の価格は世界市場のなかで大きく変動して、貨幣経済の中で生きることになった人々を不安におとし入れる。もはや若者たちは自然をよみとるための土着言語や民族知識を喪失し、島の自然の多様性と安定をはかることができなくなってしまった。こうして自らの固有文化と歴史を捨て、島の景観を理解する術を失った人々は、島で生きていくことが出来ない。人々はよりよい収入の機会をもとめて島を離れて行く。島での生存の機会を奪われ、市場メカニズムからもほうり出された人々は、環境難民

や経済難民となって島を去らなければならないのである。いかにして景観の多様性と安定性を取りもどすことができるか。われわれ研究者による科学的データの一般化もまた、普遍的眞実に帰せられるがゆえに、個別の場所から離れる傾向にある。そもそも普遍的な景観などどこにも存在しないのではないか。どこにでも適用できるような環境対応策は人間を疎外し、景観を破壊する。環境の保全や管理にあたって求められるのは一元的な対応策や開発策ではなく、さまざまな環境要素や文化的象徴によって織りなされた、すぐれて個性的な景観への対応なのである。景観史が求められる所以である。

（本稿は長年継続しておこなってきたポリネシアのクック諸島と新しくはじめたツバル国の環境調査に関する近森の下記の成果をもとにとりまとめた。）

（1）環境史における海岸侵食の社会的・文化的要因と保全に関する研究『環境州島からなる島嶼国の持続可能な国土の維持に関する研究』（環境省）二〇〇四

（2）南太平洋に最初に居住した人々―景観の創造と喪失―『日本サング礁学会第七回大会シンポジウム講演

録』二〇〇四

- (3) サンゴ礁に暮らす人々—環礁の植生変化 環境省・日本サンゴ礁学会編『日本のサンゴ礁』(環境省)二〇〇四
- (4) 環礁の危機管理システムとその変化 環境省地球環境推進プロジェクト平成二五—一七年度『環礁州島からなる島嶼国の持続可能な国土の維持に関する研究』二〇〇四
- (5) 環礁の植生変化と人間居住『史学』七〇巻三—四号 二〇〇一
- (6) 環礁における人間の初期居住『地域研究の課題』慶応義塾大学地域研究センターニュースレター第一〇〇号 二〇〇〇
- (7) プカプカ環礁の景観『日本サンゴ礁学会ニュースレター』第二号 一九九八
- (8) 南太平洋の考古学—文化的アイデンティティと考古学—『おもしろアジア考古学』連合出版 一九九七
- (9) 環礁のピット農耕『ヒト・モノ・コトバの人類学』慶友社 一九九六
- (10) ヒクが植えた椰子の樹—北部クック諸島環礁における地形発達と先史遺跡—『史学』第六四巻二号 一九九五
- (11) サンゴ礁と人間—土壌の民族考古学—『東南アジア考古学会第一〇八回例会要旨』一九九四
- (12) 環礁の土壌堆積『オセアニア学会第一一回研究会発表要旨』一九九四
- (13) 環礁と人間—北部クック諸島の調査『東南アジア考古学会会報』第一三三号 一九九三
- (14) クック諸島先史文化財の保存に関する考古学的調査『学術月報』第四六巻号(通巻五八四号) 一九九三
- (15) 礁形成と人間居住—マニヒキ・ラカハンガ環礁の考古学的調査から—『オセアニア学会第八回研究大会要旨』一九九一
- (16) サンゴ礁の形成と人間居住『オセアニア』第一巻 東京大学出版 一九九三
- (17) 死者と釣針—プカプカ環礁の民族考古学—『考古学の世界』新人物往来社 一九八九
- (18) 島のおきて—プカプカ環礁の資源管理と社会進化—『民族誌と考古学』六興出版 一九八九